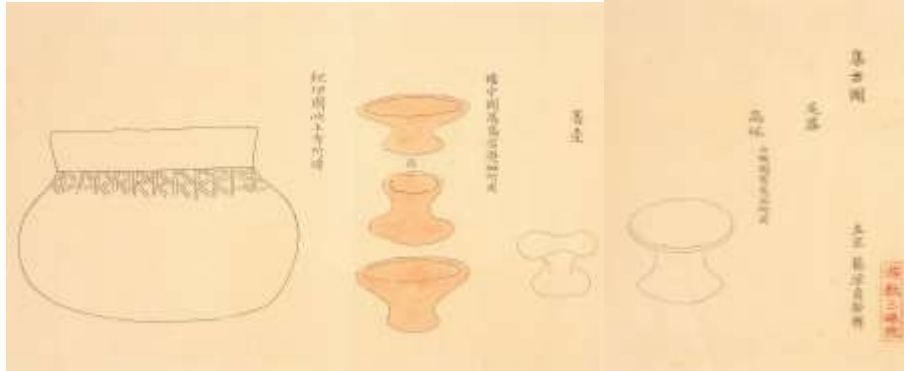


『集古図』-江戸時代の「好古」学-



平成 28 年 8 月 28 日～9 月 2 日、第 8 回世界考古学会議（WAC-8）が京都で開催されます。東アジアでは初となるこの大会に世界中の考古学者が集まり、議論を繰り広げます。

いつの時代も、昔に思いを馳せる考古学者がいたようです。江戸時代には、遺物をコレクションし古きものを好む「好古」だけでなく、それらを記録し考証するといった歴史研究の基礎が築かれ始めました。京都では、伝統を継承する公家達と、好古を学問する研究者達との間に交流が芽生え、新たな歴史考証の成果が生み出されました。

この研究者のなかに、歴史遺物を集め『集古図(しゅうこず)』を著した藤原貞幹(ふじわらさだもと)がいます。貞幹は享保 17 年(1732)、京都生まれ。藤貞幹(とうていかん)とも呼ばれます。『集古図』は彼が 66 歳で病没する寛政 9 年(1797)まで編集を続けた未完の大著です。吉田神楽岡にある墓碑には、彼の代表作のひとつとして『集古図』が記されています。石器や曲玉等の考古学的遺物が材質や用途で分類・整理し描かれており、当館では①[江戸期刊](#)と②[明治初期刊](#)の卷子本を所蔵しています。どちらも写本なので、写した人の文字や絵の癖も見受けられますね。「瓦器(がき)」の巻に京都で発見された遺物が載っているので見てみましょう。

①『集古図』22 卷の内
「[卷 10]瓦器」(部分)

②『集古図』26 卷の内
「卷 13 瓦器」(部分)



瓦器とは素焼きの土器のことです。これらの画像の「山城国愛宕郡岡崎土中所出」とある茶色いモノは何でしょう。愛宕郡岡崎は今の京都市左京区岡崎あたりです。同じく貞幹が著した『好古日録(こうこにちろく)』(当館請求記号：和||712||1)にも岡崎出土の同じ形のモノが描かれており、寸法も丁寧に記録されています。片手に乗るほどのこの小さなモノは「博古ノ人ニシメス二何ノ器タルヲシラズ」とあるように、貞幹存命中には何なのかわからないままだったようです。後の調査で、実は縄文土器の一部であることが判明したのが明治期以降とのこと。貞幹は悔しがっているのでしょうか。いいえ、この夏は彼の魂も世界考古学会議に参加し、目を輝かせて各国の「好古」学者達と交流しているのではないのでしょうか。

参考情報・文献

[世界考古学会議 第8回京都大会](#) (WAC-8)

[「アートと考古学展」京都文化博物館](#) 9月11日まで『集古図』を出展中

[「先人達の京都研究」](#)京都府立総合資料館 デジタル展覧会

松尾芳樹著「藤原貞幹の『集古図』」『京都市立芸術大学美術
学部研究紀要』第 36 号

(2016 年 8 月 29 日公開)